

第三二回国際医史学会会議の印象

古川 明

一九九〇年九月三日(月)から七日(金)までベルギーのアントワープで、国際医史学会の第三二回会議が開催された。アントワープは一九二〇年に第一回会議が開かれた本学会誕生都市で、七〇年振りの開催である(図1、2)。

会 場

会議会場は「エルゼンフェルト」Elzenveldで、アントワープの中心地であり、ランゲガストハイスト通り面に面している(図3、4)。ここは社会福祉財団の経営する会議展覧会センターで、昔エルゼン(ハンノキ adler)が密生した畑 veld だった。財団の一事業として、セントターの裏にはセントエリザベス病院が付属している。

起源は古く十三世紀に、ノートルダム大聖堂の付近に修道院の病院として発足したが、環境が悪くなったので、一三二八年に現在地に移転した。一七九七年に修道院を閉鎖し、病院経営を主とするようになり、最近一部が社会文化センターになった。

開会式は九月三日(月)午前九時、アントワープ市公開堂の講堂で施行された。トリコット会議会長 J.-P. Tricot、シヤデワルト国際医史学会会長 H. Schadowaldt、ドゥ・デューウエック名誉会長 C. De Duvec の挨拶のあと三題の記念講演があった。

SOCIETAS BELGICA HISTORIAE MEDICINAE



図2 ベルギー医史学会の紋章。ヴェサリウスと解剖図(会議のプログラムの表紙に用いられた)



図1 第32回国際医史学会議の紋章。アントワープのシンボル・ノートルダム大聖堂が描かれている

世界各国からの参加者

参加者は三三一名の登録者に同伴者を含めて五〇〇名以上となった。登録は地元ベルギーの六〇について、アメリカの三三が最も多く、イギリス、オランダ、フランスがそれぞれ二〇以上である。医史学研究の盛んなドイツが一八と少なかったのは、中堅の研究者が老化停滞気味の本学会をボイコットしたためという(石田純郎による)。

ギリシヤ、カナダ、オーストラリア、スペイン、イタリアなど一〇前後、スエーデン、ハンガリー、ルーマニア、チュニジアなどが五を超している。日本からの参加者は石田純郎、山崎茂明、古川明、羽生順一の四名だった。故本間邦則が演題を申し込んだのに、病気のため取消し、学会終了後十月十二日に死去したことは誠に残念である。

開会の前日九月二日(日)夕刻に、エルゼンフェルトの大広間で全員の懇親会が開かれた。

講演と報告



図 4 エルゼンフェルトの建物の一部(内庭). 右端が講堂の入口で、講堂は入口の右側の建物にある



図 3 会議の会場となった「エルゼンフェルト」の紋章
ハンの木 adler

一般講演報告は八月三日午後と四日、六日、七日に、エルゼンフェルトのABC三会場で行なわれ、演題は一五のポストター・セクションを含めて一九〇に達した。発表には英語とフランス語が使用された。

会議のメインテーマは、(1) 医療・呪術・宗教、(2) 十九世紀の医学、(3) 一六五〇年までの医学書の三題、また特定課題は、(1) 耳鼻咽喉科の歴史、(2) 十七〜十九世紀、ネーデルランドの産科、(3) 睡眠病の歴史だった。

会議の発表は古代、アラビア、中世、十九世紀、二十世紀、図書、精神科、消毒と細菌学、自由課題に配分して実施された。

講演のすべてを紹介することは困難なので、抄録集を参考に、筆者が関心を持った数題について記載してみた。

会長講演(ベルギーのトリコット)は「プラントインの医学図書」である。プラントイン Plantijn (一五二〇〜一五八九) はフランス生まれだが、アントワープで学術図書出版を営んだ。ルネサンスの当時アントワープには大学がなかったが、彼はベルギーにおける科学図書のほとんどを出版し、科学、医学などの進歩に大きな貢献をした。

一九六種の出版図書のうち医学図書が四九種ある。ヴェサリウスの新しい解剖学書を出版したが、ガレノスの業績も放棄することはなかった。ペスト、梅毒、レプラなど当時問題にされた各種疾患の図書が多い。

彼の養子で後継者のモレットゥス Moretus の名をとって、現在アントワープには、「プラントイン・モレットゥス印刷博物館」があり、グーテ

ンベルクの聖書初版本などの重要な資料が所蔵されている。

オランダのハーネヴェルト G. Haneveld は「二人の耳鏡発明者」で、ホフマン F. Hofmann (一八〇六—一八八六) とデン・ブルーク Van den Broek (一八一四—一八六五) の二人を挙げ、とくに後者が優秀な耳鏡を創作したと報告した。ブルークは一八五二年ジャワに渡り日本にも行き、医学や電信機、ダゲロタイプ、蒸気動力など、西洋の科学技術を紹介指導し、日蘭辞典を作つて、一八五七年ジャワに戻つた。

筆者の調査では、ブルークは古賀十二郎著『西洋医術伝来史』や日蘭学会編『洋学史事典』によると、モーニッケの後任として一八五五年に来日し、後任者はボンペである。著書に『オランダと日本』があるが、『日蘭辞典』を作つた記載は見当らない。

ポルトガルのヴィエイラ・レイス C. Vieira Reis は「ガルシア・ドルタの著書コロキオスとエクルーズ」を報告した。ガルシア Garcia d'Orta (一四九〇—一五六八) の薬学書 Coluquios は一五六三年にインドのゴアで出版されたが、ポルトガル語で書かれ、ラテン語でなかつたのでヨーロッパでは普及しなかつた。一五六七年ベルギー人エクルーズ Charles de l'Ecluse (ラテン名 Calorus Clusius) が概要ラテン語訳をアントワープで発行してから広く知られるようになった。

筆者は一九八二年に「ガルシア・ドルタ」の報告をしたことがあるので、前記発表に関心を持った。ガルシアは「ポルトガルの医学の父」といわれるほどだが、ギャリソンをはじめ普通の医史学書には記載がない。三木栄『体系世界医学史』には記載されている。演者は「ガルシア」の名をもつと広く普及させたのであろう。

カナダのハッチンソン J. Hutchinson は「赤十字に対する医学的反論」を報告した。一八六〇年に発表された赤十字社の構想に対しては、賛否両論が出され、意外にもナイチンゲールが反対していた。赤十字社は軍陣医学看護学に理解が足りず、平時のボランティア活動は戦時には役立たないというのが英仏医学界からの反論であつた。この論争が解決したのは、やっと一八八〇年ごろだった。

日本からの発表は石田純郎と山崎茂明の二題があった。石田は現在ライデン大学在籍中で、ホイケルス H. Bekkers との共同発表だった。

石田の演題は「鎖国時代の日本における西洋医学の学究的特色」で、日本が受容した外国図書を中心とした報告である。概略は『医譚』復刊五九号に掲載された。

山崎の報告は「南北戦争以前のアメリカの医学校の初期教授の学問的源泉」で、一四三名の教授について出身を調査した。

「医史学」に関する報告は四題あったが、医史学の教育・研究など方法論はなかった。アメリカのマノリエ V. Manolin は「国際医史学会宝典」と題し、第一〜三〇回（一九二〇〜一九八六）会議の報告につき、人名と物件別の索引を製作したという。

会議の総会は九月七日午後開催され、次回第三三回会議は一九九二年九月スペインのセビリアと決定した。

展示と見学

会期中七種の医史学展示が開催された。図書、麻酔、古病理学、病院医学、らい、個人収集、医学切手である。

筆者がとくに関心を持ったのは医学切手展 *Medical Philately* である。エルゼンフェルトの教会礼拝堂全部を会場に当て、約二〇フレームに、四名の出品した切手を配列してある。この展示によって、医学切手が医史学の研究に役立つことを示したと思われる。

見学はアントワープ市内のほか、学会主催の見学旅行（九月五日、ゲント、ブルージュ）と学会終了後希望者の見学旅行（九月八日、ゲール、ルーヴァン、ブリュッセル）があり、筆者は参加した。

アントワープのルーベンスの家、プランティン・モレトウス印刷博物館、ノートルダム大聖堂、ダイヤモンド博物館、

ブルージュの聖ヨハネ病院付属メムリンク美術館、ゲールの国立精神病院、ルーヴァンの大学キャンパス、ブリュッセルのエラスムス博物館など、医史学研究上参考になることが少なくない。

(日本医史学会名誉会員)